【令和４年度　コミュニティ・スクール太宰府西小学校　校長通信】　No.2

まほろばの丘から

令和４年５月１１日　　文責　校長　江口　尋信

授業参観と歓迎遠足

４月２８日（木）に２年ぶりの授業参観を行いました。これまで、新型コロナの感染状況により中止をしてきましたが、やっと実施することができました。１～３年生は、初めての授業参観ということになります。子どもたちの学習の様子はいかがでしたか。高学年でも、廊下にいるおうちの人が気になってそわそわしていたようです。学校や子どもたちの様子を実際に見ていただくことは、本校の教育活動を理解していただく上でまたとない貴重な機会です。授業参観や運動会、愛校作業等、保護者の皆さんにご来校いただく行事が予定どおりに実施できることを祈るばかりです。

また、５月６日（金）には歓迎集会、歓迎遠足を行いました。歓迎集会は１年生と６年生だけが体育館に集合し、他の学年はオンラインでの参加でした。１年生は、６年生といっしょにクイズやじゃんけんゲームをしたり、歴史スポーツ公園でいっしょにお弁当を食べたりするなど、楽しい１日になったようです。他の学年も、久しぶりの遠足を楽しんでいました。小雨が落ちてきて、予定より早い帰校となりましたが、実施できて何よりでした。

歓迎遠足の一コマ（1年生と6年生）

「失敗」を恐れない

先日、「挑戦しない日本の若者」という雑誌の特集を読みました。書かれていたのは、若者の行動について、困難にチャレンジしようとしない、無気力である、無難に事を済まそうとするといった傾向がみられるというものでした。若者をまとめて批判的に捉えてしまうことは決してよくありませんが、書かれていることがあるとすれば、若者ばかりの責任ではないように思います。

このような事例があります。アメリカの心理学者の実験で、簡単なパズルを解いた５年生に結果を伝え、Ａ群の子どもたちには「あなたは頭がいいんだね」と彼らの知性を褒め、Ｂ群の子どもたちには「一生懸命やったね」と彼らの努力を褒めました。すると、次の問題として難易度が違うパズルを選択させたところ、「頭がいいね」と褒められたＡ群の子どもたちは失敗を恐れて簡単なパズルを選択したそうです。一方、「一生懸命やったね」と努力を褒められたＢ群の子どもたちは、より難しいパズルに挑戦したのだそうです。つまり、いい結果を出したことを評価され続けた人にとっては、いい結果が出せなくなるかもしれない選択（新たな課題に取り組むこと）は避けたいという心理が働くのです。

若者が挑戦しないとすれば、社会全体が、できたか・できなかったか、何点であったかという「結果」ばかりに目を向け、「過程」を認めてこなかった結果とも言えるのではないかと思います。陸上選手・為末大氏は「チャレンジには一定の失敗の確率を含む」と言っています。為末氏は、チャレンジする以上、失敗は当たり前だと言っています。わたし自身、子どもたちの挑戦そのもの（「過程」）に目が向く教員でありたいと思います。